

# 被災地の いま

元教員

加賀八重子

福島・南相馬市②



▲学校付近の放射性廃棄物置き場

震災と原発事故から8年半余が経過しました。私は教員を退職し、教職員や保護者との相談の仕事で時々学校を訪問しています。

## ■学校の子どもたちのこと

2年生の芽衣ちゃんは震災、原発事故から3ヵ月後の2011年6月生まれです。出産を控えたお母さんの心配はどんなにか大きかったことでしょう。出産後も不安な気持ちが強く母娘は家族と離れて暮らすことになります。芽衣ちゃんは幼稚園生活では新しい環境に慣れるのに時間がかかる子でしたが、入学後の夏休み明けから登校できなくなりました。今は学校と連携できる別の場所で毎日大好きな職員に嫌な気持ちややりたいことを受けとめてもらいながら自分のペースで遊びや学習に元気にとりくんでいます。

1年生の悠さんの家族は線量が高くて立ち入りできない地域からの避難者です。いくつも避難先を変えて生活し悠さんはこの地で入学を迎えました。休み時間はよく担任の膝の上に乗ってきます。授業中は時々離席して黒板の前で寝転がったりぐるぐる回ったりしてアピールしています。「だめだよ」と言われると大きな声で泣いたり暴れたりするので担任は少し見守ってから「一緒に勉強する？それともお隣の教室で少し休む？」等と声をかけています。隣の教室で休む時は支援員や管理職が見守るなど校内でやりくりして協力しています。まずは悠さんにとって大好きで

安心して一緒にいられる大人との関係を育てていくことを大切にとりくんでいます。

避難生活や継続する不自由な生活のなかでやり残してしまった発達の課題がたくさんある上にそれに十分にとりくめない状況から困難さが増している子どもたちが多くいます。子どもながらに周囲の状況を察し、「私の方だけ向いて」「もっと話を聞いて」「いやだ」などの気持ちを封じ込めてしまったかもしれません。親子の安心した関係に課題が多くみられます。メディアへの依存と経験不足の傾向も強いです。発達に弱さを抱えている子どもたちは特にこの環境に影響を受けやすいように思います。

## ■子どもへの影響はまだ進行形なのに

1歳半や3歳児健診では子ども自身の発達の遅れと母親の不安の強さ等から要経過観察が50%以上の高止まり状態です。また学校では何らかの支援が必要な児童生徒の割合が震災前の2倍位に増えています。特別支援学級や通級教室で支援している子の倍以上の子どもが通常学級担任の配慮任せになっている状況もあります。現場の教職員の思いに反し学力向上や教育のスタンダードなどの押し付けで、子どもたち一人ひとりにじっくり寄り添い柔軟に対応することができにくくなっています。多忙化や教職員不足も深刻です。何より子どもたちにとって安心で楽しい学校や地域になるよう力を合わせたいです。(おわり)